

村山貞幸：問題との格闘が社会人基礎力を身につけさせる

～膨大なイベント企画・運営を通じた村山ゼミの取り組み～

オムニバスによる問題解決学総論の B クラスの第八回目として、村山教授がご登壇。ゼミでの取り組み事例から問題解決について話が始まる。以下、講義のポイントをまとめてみよう。

社会が抱えている問題として「企業が求める人材を、大学が送り出せていない」ということがある。企業が入社後、新入社員を再度教育しなければならないという無駄が生じている。たとえば、三井住友銀行の頭取の話として「われわれは資格を取っている学生なんて興味が無い」というような指摘も出てきている。要は、実社会が期待している人物像と大学が輩出している人物像（そしてそういう人物に育てようとしているカリキュラム）とのギャップの大きさが問題だ。

それを解く一つのキーワードは、「社会人基礎力」だと考えている。この社会人基礎力とは、職場や地域社会で、多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力のことだ。いわば、企業側が大学に「こんな力をつけて欲しい」という力と言えるだろう。このちからは以下の三つの力からなる。

1. 前に踏み出す力（アクション）
2. 考え抜く力（シンキング）
3. チームで働く力（チームワーク）

これらの力を付ける、すなわち「企業からの期待に応えることが大学の行うべき教育だ」という信念のもと、村山教授は「イベントの企画・運営をゼミ活動として取り組むことで、これら3つの社会人基礎力を成長させる」ということを実践している。

（村山ゼミのプロジェクト）

イベント：「日本伝統文化継承」組織名：「日本大好きプロジェクト」

- ・訪問型イベント：幼稚園、保育園、児童館、小学校、高齢者施設などでのイベント
- ・集客型イベント：神社仏閣、イベントスペースでのイベント

そのためのポイントは、次の通りだ。

< 1. 学生の能力を遙かに超えたハードルの設定したプロジェクトの実施 >

「プロと競争することで、確固たる社会人基礎力をつけよう」。これが村山流の一つ目の

ポイントだ。たとえば、広報活動であれば、PR 会社との競争、企業の広報担当者との競争だ。新聞の一面にイベントなどの記事を採用してもらえるような試みを行ってきた。

また、イベントの企画・運営にも参加している。たとえば、東京ミッドタウン主催のイベントの企画・運営がその一例だ。まさにプロのイベント会社と競争することで、社会人基礎力を付けるということだ。

<2. 膨大な仕事量とマルチタスクによる作業>

「年に 300 回を超える膨大なイベントやプロジェクトに参加する」。これが村山流の二つ目のポイントだ。膨大なイベント参加に付随する膨大な作業をこなすためには、一人一人がマルチタスク（複数の作業を同時並行）で仕事をこなすことが必要となる。このマルチタスクというのは、単に作業が増えるということではなく、ものすごい負担が生じる。この負担に耐え、また上手く仕事を回す能力なしにはこなせない。まさに社会人に必要となる力を付けようというものだ。

<成功だけが学びではない>

これら果敢なプロジェクトへの取り組みでは、しばしば組織に危機的な状況を生じさせる。この危機的な状況を経験すれば、チームで働く力が向上する。

それ以外にも、膨大な作業量をこなすことはプロジェクト管理力を、プロレベルの企画を考えることは想像力を付けさせる。そして、それらの仕事は簡単に OK を取れるものではないから当然ダメだしをされる。これを乗り切れば、絶対にあきらめない実行力、つまり前に踏み出す力をも身につくという。

はじめに説明されたとおり、「学生の能力を遙かに超えたハードル」を設定することなしに、これらの経験はできない。タフな環境の経験が学生を強くするという村山流のこだわりが垣間見られる。

<事例の紹介>

村山ゼミの膨大なイベントの内いくつかを紹介された。増上寺や東京ミッドタウンでのイベントや二子玉川ライズ（商業施設）への集客イベントなどだ。

「学生の能力を遙かに超えたハードル」を理解してもらうために、あえて、上手くいかなかった事例についても紹介された。こういったリアルな事例の話に学生は引き込まれる。

<まとめ>

村山ゼミの取り組みは、問題とその解決の繰り返しだ。それも、生ぬるい問題ではなく、実社会のシビアな問題との格闘であることがポイントだ。このあたりに村山ゼミの学生が、社会から高い評価を得ている理由であることは間違いない。そして、その取り組みが社会的な意義があるからこそ、メディアが注目する。普通の大学生が着目されるレベルではな

い、もの凄い成果だ。そして、このメディアからの着目が「自分たちが社会の問題を解決している」という実感が彼・彼女らをさらに後押しするだろう。社会人基礎力を備えた村山ゼミの学生達が社会に出ても次々と問題を解決する人材として活躍する姿が思い浮かぶ。同じ大学に通う学生にとっても負けられないというやる気を喚起する素晴らしい講義でした。